松尾南の原遺跡発掘調査概報

1972・1974

三菱電機株式会社中津川製作所
飯田市教育委員会

松尾南の原遺跡発掘調査報告

I　環　　境

1．自然環境

長野県飯田盆地は東に赤石山脈，西に木曽山脈が連互し，この中間を天竜川が南流し，その両岸に見事な河岸段丘が発達している。飯田市松尾地区（旧松尾村）は飯田市街地より鼎町を間においたすぐ南にあり，天竜川西岸に天竜川より幾段もの段丘があって次第に西方に高まっている地形にある。遺跡の所在する南の原は伊那谷段丘の第３段丘面[(1)]にあって，標高490ｍ，天竜川との比高110ｍを測り，松尾地区では最も高い段丘面にある。

遺跡の西方はさらに上位の名子熊段丘面があり，高距10ｍとなっている。また，東方は一段低い御射山面があり，ここには三協精機工場がたてられ，高距30ｍを測る。それより下位の第７段丘の毛賀の諏訪神社面，さらに小さな段丘面があって，緑ヶ丘中学校のある毛賀の沖積段丘面となり，さらに下位の清水面となって天竜川氾濫原へと続いている。

南の原は東西450ｍ，南北1000ｍに及ぶ広い段丘面で，北500ｍに飯田女子短期大学があり，さらに北へと八幡原がつづき，名古熊の低い面へと連続している。しかし南は，北の沢が流れ，名古熊面では浅い浸蝕をみるのみであるが，南の原面では急に深い浸蝕谷を形成し段丘面を切り，この沢を距てた南に松尾小笠原氏の根拠であった松尾城跡がある。その南は毛賀沢川の深い谷を距てて鈴岡小笠原氏の本拠であった鈴岡城跡が相対している。

南の原の微地形をみると名古熊段丘崖下は片羽の集落が南北方向に並び，そのすぐ東側は東西巾約50ｍの低地となって南北方向の水田帯となり，南端は北の沢へと落ちている。水田帯の下層は厚い砂層となっているとのことで古い河床であったとみられる。この水田帯以外の東側は一見平坦な桑園となっているが，この平坦面を詳細に観察すれば，水田帯の低地からすぐ東側は緩い丘陵状をなし，さらに東にいくに従い低くなり，台地の中央部はやや凹地状となり，これより東にいくに従い僅かながらも高さを増して段丘端部に達している。

発掘調査によれば，水田帯から東150ｍのトレンチでは厚さ60㎝の植物遺体を含む粘土質の堅い堆積層があり，東段丘端部から西150ｍの工事中の観察では深い粘土質の黒土の堆積がみられている。中央部の凹地状部と，西側の高地部とは130㎝，東段丘端部とは50㎝のレベル差をはかる。この凹地状部は耕地整理前は雨期には所によって水が溜り歩行も困難し，農耕の不適な場所であったといわれている。東西巾90ｍ，南北方向については未調査であるが，広い範囲にわたる湿地帯，または，長い期間にわたっての沼の存在が推定される。

2．歴史的環境

南の原は鳥居竜蔵の「先史及び原史時代の下伊那」によれば，上位名古熊段丘面とともに縄文時代の遺物分布地となっており，今まで石斧や土器片の採集が報ぜられている。発掘調査前の分布調査では縄文時代，弥生時代の打石器が表面採集され，中世陶器片も発見されているが，昭和42年３月の遺跡台帳には誤って落されていた。

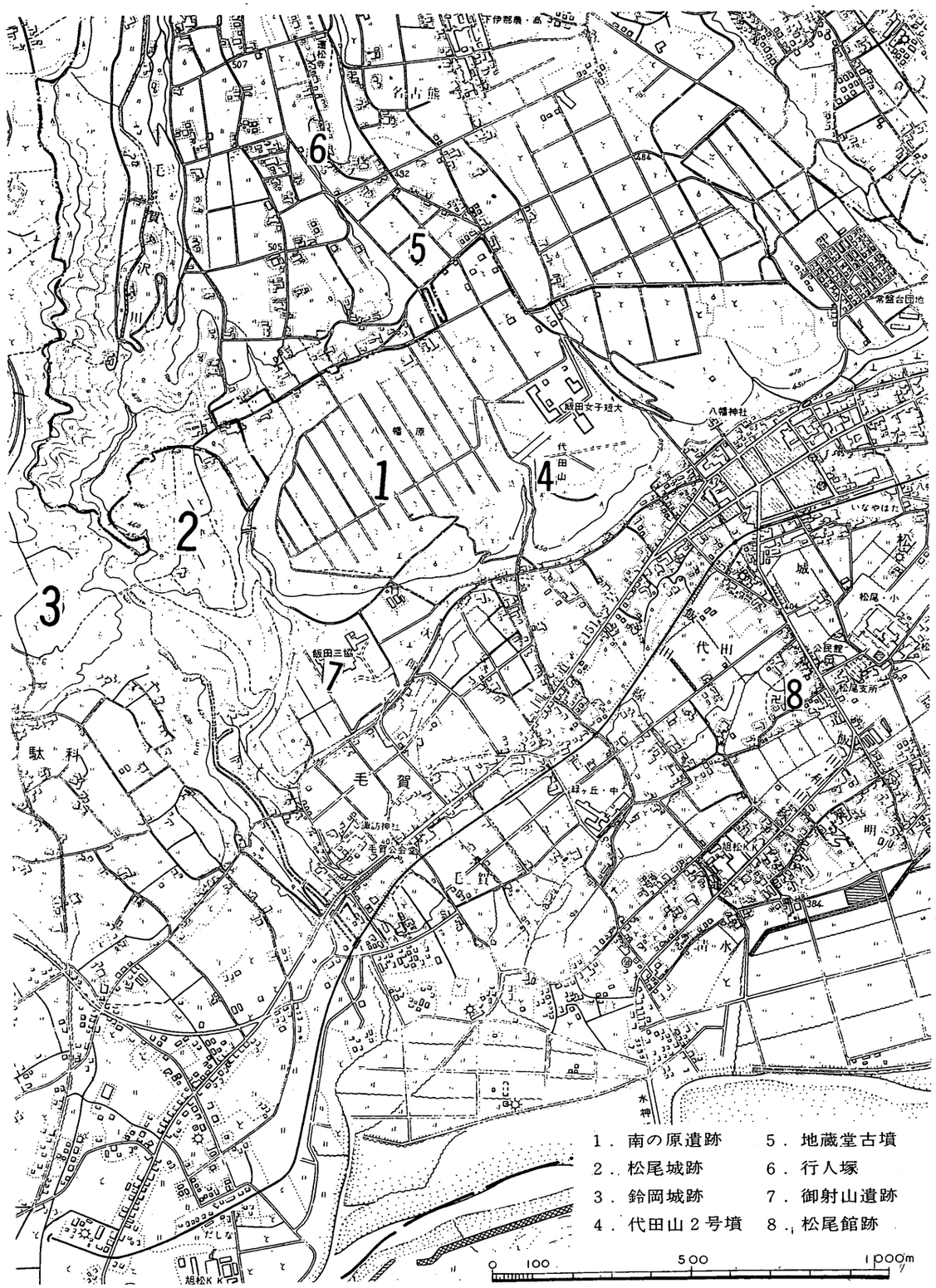


図１　松尾南の原遺跡位置図及び周辺の関連遺跡（１：30.000）

南の原の一段低い御射山では縄文中期の甕が出土しており，一段高い名古熊の行人塚よりは縄文土器と炉址が発見されている。本遺跡の西方400ｍの名古熊高位段丘面の端に地蔵堂古墳があり，北東600ｍには代田山第２号墳がある。

ここで特に注意したいのは，北の沢を距てた段丘の端に松尾城跡のあるところである。中世信濃守となった小笠原氏の本拠の地である。本城の起源については正確なところは判明しないが，少くとも南北朝時代には存在していたことは明らかである。その後しばらくは伊那盆地における中心的な城であり，天正18年（1590）小笠原信嶺が武蔵本庄へ転封された時までつづいた。

この間，同族で直親関係にある松尾小笠原と鈴岡小笠原との間に信濃守護職をめぐる対立が深まり，推定明応２年（1493）に松尾は鈴岡を襲って破り，落城さしているが，この後鈴岡の残党，松本深志小笠原，下条氏の連合勢力の攻撃を受け，しばしば合戦に及んでいるが，その圧迫にたえず，松尾小笠原は甲斐に身を寄せ，再び松尾へ復帰したものとみられる[(2)]。この対立時期には松尾城周辺においても戦火が交わられたと考えられる。今日，本曲輪，二の曲輪，三の曲輪の跡，空濠が残存し，中世の平山城の姿を厳存している。本遺跡の西50ｍを南北に通る道は片羽道と呼ばれ，飯田市と鼎町の境をなしているが，この道は中世においては城に至る追手の道であったと考えられている。

注１　松島信幸「伊那谷の段丘」1966　下伊那地質資料№２

注２　宮下操　「下伊那史第六巻」昭45　下伊那誌編纂会

本稿は大沢和夫の原稿をもとに調査結果を加えたものである。

II　発掘調査経過

昭和47年に松尾南の原に三菱電機株式会社中津川製作所飯田工場が建設されることになった。この南の原は，鳥居竜蔵の「下伊那の原史及び先史時代」（大正13年）にはアイヌ派厚手土器の分布地となっており，今まで縄文時代の土器，石器が採集されていたところである。しかし，昭和42年３月発行の，「遺跡分布図，長野県」には，誤って南の原遺跡が落されていた。このため用地買収後の分布調査によって縄文時代，弥生時代の石器が表面採集され，中世陶器片も発見され，遺跡として飯田市教育委員会は，工事着工前の発掘調査を工場側に要請し，1972年３月21日より４月６日にわたる14日間の発掘を実施したものである。用地面積は７haに及ぶ広範囲であり，費用，期日の制約で，遺物採集が多く，地形的にも好条件とみる用地の西端部の水田地帯に接した南北100ｍ，東西36ｍの地点を調査区とした。(図2)

調査結果では中世屋敷跡，住居址，火葬墓群，土坑墓が発見され，中世陶器の数多くと，茶臼等の遺物があり，重要遺跡とみられた。しかし，その報告は佐藤が「日本考古学年報25（1972年版）」にその概略を載せたのみで，中世屋敷跡と，中世陶器の十分な把握がなされず，それに次から次への緊急発掘調査に追われ，今日まで遅らせた怠慢の謗りはまぬがれない。

昭和49年度には工場拡張計画により，現工場地の北側に東西120ｍ，南北25ｍの区域に新しく工場が建設されることとなり，その発掘調査を1974年８月17日から開始したところ，この調査中，計画外の用地の西端部の一画に工事用資材置場の建築のためブルトーザによる整地がはじまり，この地区をＢ調査区，前地区をＡ調査区とし（図２）調査を引続いて行ない，９月19日までの28日間の調査となった。この

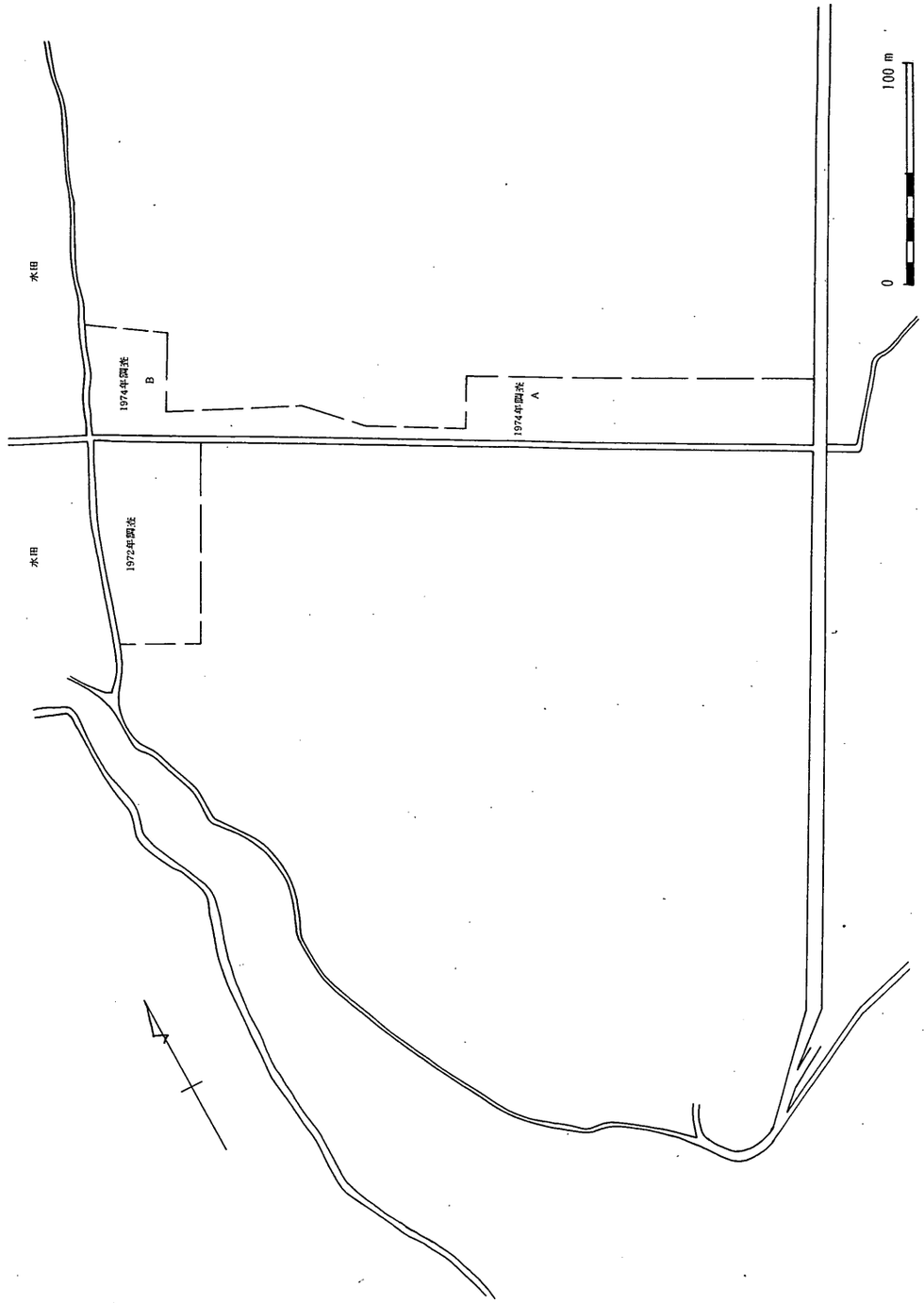


図２　松尾南の原遺跡調査区域図

間残暑のきびしさと，台風14号の豪雨にもあい，調査は苦労を重ねた。

この調査によって72年度調査による屋敷跡との関連遺構が発見され，予想外の成果を上げ得ることができた。さらに75年，76年にわたっての工場建設計画があり，その発掘調査によって松尾城跡との関連をもつ中世の城郭外における施設に対して，ある程度の究明がなされるものと期待される。

本報告は，1972年，1974年の二次にわたる発掘調査の概報であり，次いで行なわれる，75，76年度の調査完了時に綜合報告を予定しており，発掘調査日誌を略す。

Ⅲ　調　査　結　果

１．1972年の発掘調査

発掘調査された遺構は（図３），いずれも中世の屋敷跡１，住居址２，土坑10，火葬墓群1である。

(1)　屋敷跡（図４）

４棟の建造物からなり，床面は全面に焼土が広がり，その区画をなしていた。この４棟を発掘段階では，東側の発見順に１号～４号住居址と整理してきたが，一連のものとみて中世屋敷跡としたものである。

１号は南北5.4ｍ×東西6.3ｍ，東側は浅い掘りこみとなるが西にいくに従い平坦となる。東側に南北方向に土台石が２列に３こずつ並び，西側は掘立柱となる。２間×２間の建物であるが，東側には床，南側には廊下が付く座敷風の建造物とみたい。遺物は中世陶器を僅に検出したのみである。

２号は，１号より一段低い位置にあって，東西約５ｍ×南北６ｍの２間×３間の建物とみられる。南寄り中央に1.8ｍ×1.8ｍの囲炉裏が掘りこまれ，この北に接して，これより古いとみる1.8ｍ×1.2ｍの囲炉裏が掘りこまれていた。前者の中央より北よりに天目茶碗の完形品，後者の北隅に茶臼の完形品が埋められた状態で出土をみた。２号の南端の中央部から径1.1ｍの円形に南側にえぐりこむ深さ1.2ｍの貯蔵穴とみるものがあり，この中より常滑の大甕片が数多く出土している。２号は遺物は多く，すり鉢，皿，天目茶碗片，内耳土器片が数多く検出されている。

２号の北に接して３号がある。南北3.6ｍ×東西3.5ｍ，深さ96cmと地下に掘りこまれた建物で，この覆土は，焼けた壁土（すさにわらを切りこむ）が重さなり，焼け落ちた状態を示すもので，床面には多くの木炭と焼木がみられた。内部は南側壁側には，人頭大の石が並び，壁はゆるい傾斜をもって出入口をなしている。他の３方の壁はほぼ垂直となり，壁にそって巾10cm～20cm，深さ10cmの周溝がめぐる。中央より北よりに焼土があり，この上に石臼の下部が置かれ，皿４枚が重ねられて出土している。この他遺物には小柄が検出されている。

４号は２号の面に並び，6.3ｍ×6.3ｍ，３間×３間の掘立柱の建物である。柱穴間隔は1.8ｍ・2.7ｍ（１間・1.5間）となっている。出土遺物には，すり鉢，天目茶碗，皿，常滑の甕等の陶器片と素焼土器内耳土器片がみられている。

(2)　住　居　址（図３）

屋敷跡より南67ｍに中世の６号住居址，これより５ｍ南に５号住居址がある。

５号住居址は南北3.5ｍ×東西4.2ｍの長方形の浅い竪穴住居址で主柱穴は４ことみられる。東側にわ

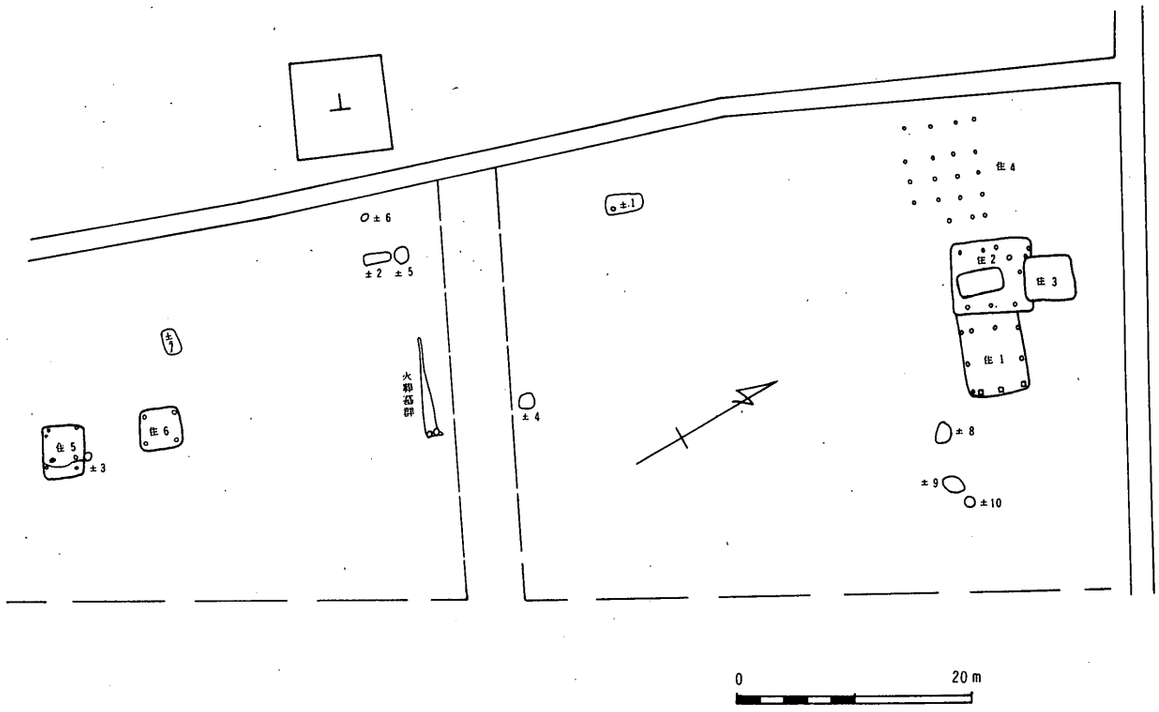


図３　松尾南の原遺跡調査区域図　1972年調査遺構図

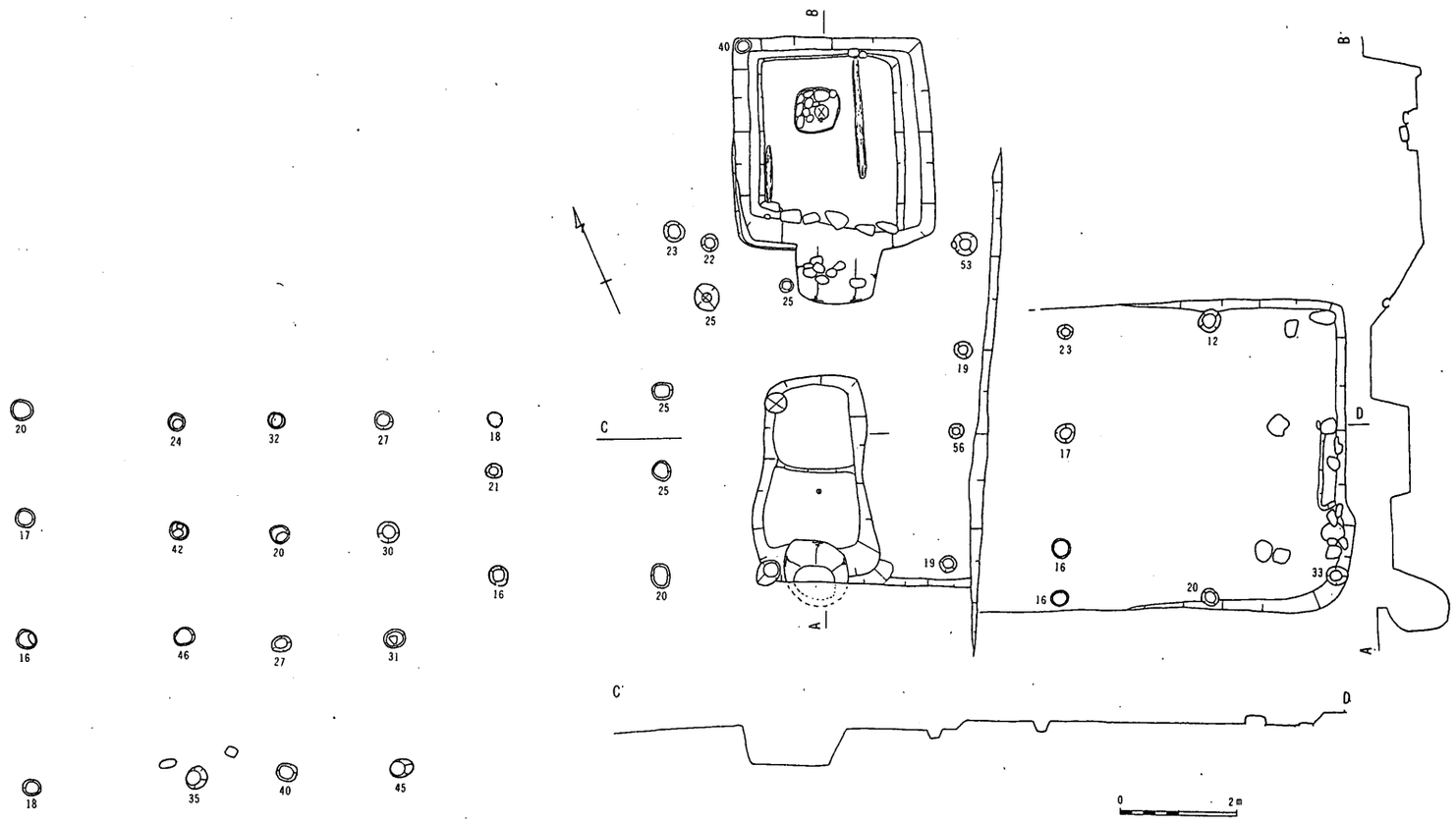


図４　松尾南の原遺跡屋敷跡１号

ずかに高い面があり，その西側の南寄りに炉址とみる焼土をもつ掘り凹みがある。遺物にはすり鉢，内耳土器片がある。

6号住居址は，南北3.4ｍ×東西3ｍの壁高20cmの竪穴住居址で，主柱穴4こをもつ。遺物は天目茶碗片，皿片，内耳土器片，鉄器片の出土をみている。

(3) 土坑墓（図3）

1号～10号の土坑が調査された。これら土坑のうち1～1.5ｍ×2ｍ大の長方形となるものと，円形または不規則な楕円形をなす土坑の2形態がある。前者は明らかに土葬墓とみられるものであり，後者には火葬墓と考えられるものもある。遺物の出土をみたのは6号土坑のみで，天目茶碗片，内耳土器片，すり鉢片等が数点，フイゴ片1が検出されている。

(4) 火葬墓群（図3）

屋敷跡の南45ｍに東西方向に長さ8ｍ，巾は東端部では2ｍ，西端部は35cmとなるが，約70cm～100cmの巾に浅い掘り凹みをつくり，この上に拳大から人頭大の石を所によっては多く詰め，また，僅かに置く程度の所もあり，木炭と火葬骨灰が全面的にみられ，西側には焼土で壁が堅められていたのも観察された。最終的には11の火葬墓よりなると推定され，いずれも浅い土坑を掘り，①内部に石を詰めるもの，②土坑のみのものの2形態の火葬墓が看取された。遺物は，上層の石の間にみられたものが多く，天目茶碗，すり鉢，皿，常滑甕等の破片と内耳土器片，素焼土器，鎗の石突1が検出されている。

2．1974年の発掘調査

本次発掘調査はA・Bの2調査区について行なったものである。南の原台地の片羽への道の北側，東西315ｍの間を，A区では台地の東側より東西130ｍ，南北20～30ｍについて，B区では台地の西側より東西115ｍ，南北広い所は45ｍ，狭い所は5ｍ内外に対しての調査である。（図2）

発掘調査した遺構（図5・6）は，東西方向の溝遺構，その北側を平行する路址または土塁址ともみるもの，柱列，住居址3，土坑14，ピット群1，この他台地の中間部に東西約90ｍにわたる沼状跡が認められた。（図7）

(1) 溝状遺構

台地の中央部の沼状跡をはさんで東（溝Ⅰ）と西（溝Ⅱ）に，東西方向に溝が掘られ，さらに南北方向の溝Ⅲがある。

溝Ⅰ（図5・8）は，沼状帯の東端部から東へ約50ｍのびた所で南に向きを変え，さらに南東方向に緩いカーブを描いて段丘端から崖端浸蝕部へと続いている。溝は沼状帯に接した第4トレンチでは，ローム面での巾1ｍ，深さ20cmと浅く，東にくるに従い大きさを増し，南にカーブする地点では，巾2.3ｍ深さ115cmとなり，薬研堀とみる形状となる。

溝Ⅱ（図6・7）は，沼状跡の西端部からほぼ直線状に西の水田地帯にまで延びるとみる溝で，沼状跡に接する第12トレンチでは巾1.8ｍ，深さ40cmの溝とこの北80cmに巾1ｍ，深さ20cmの溝が並ぶ。その調査は片羽部落へ通ずる道路敷となり，このため十分な調査はできなかった。第8トレンチでは，巾1.4ｍ，深さ30cmの溝とこの北に小さな溝が2条みられている。溝Ⅱの調査は不十分ではあるが，溝Ⅰに比し，規模の小さなものとみられる。

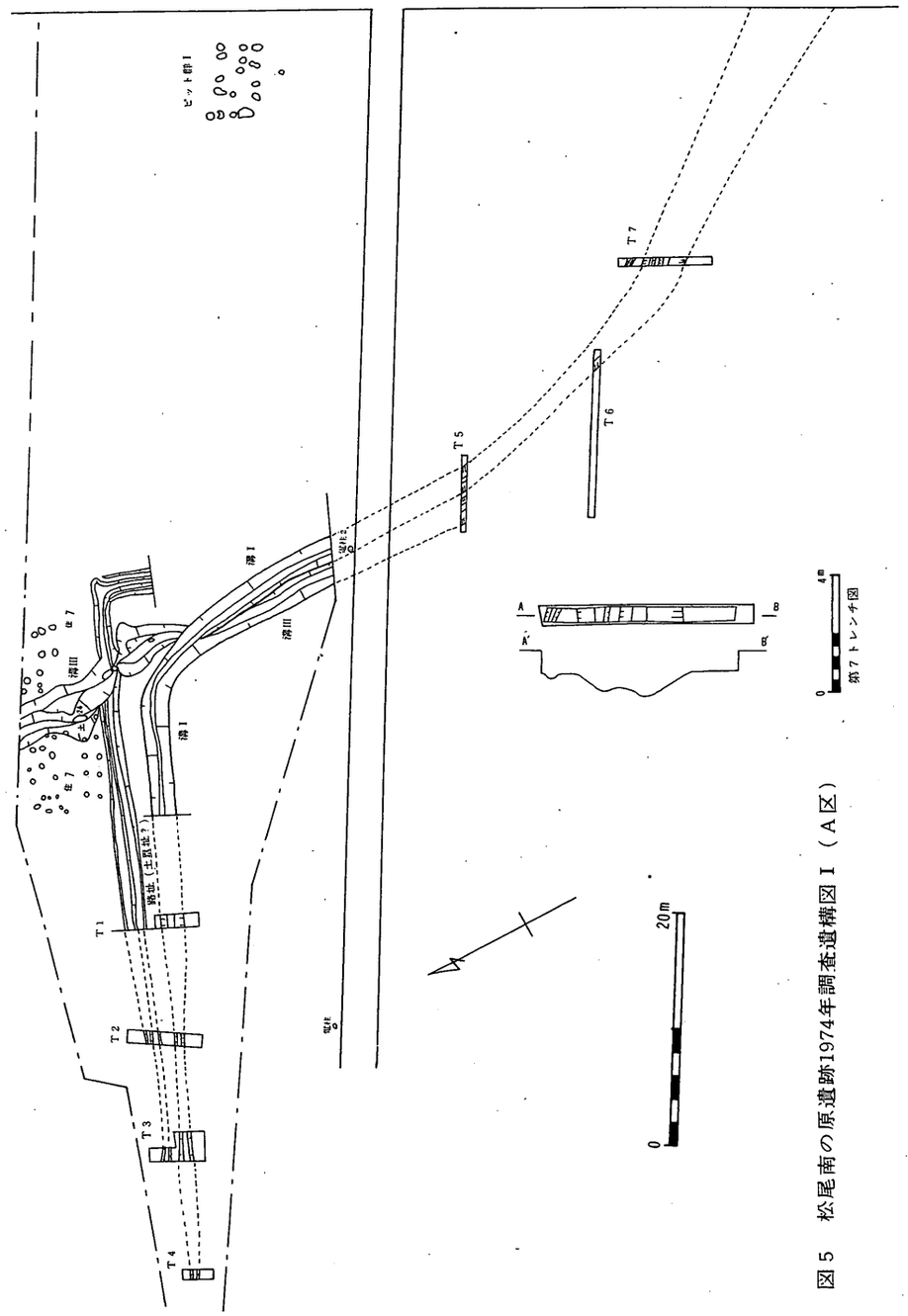


図5　松尾南の原遺跡1974年調査遺構図Ⅰ（A区）

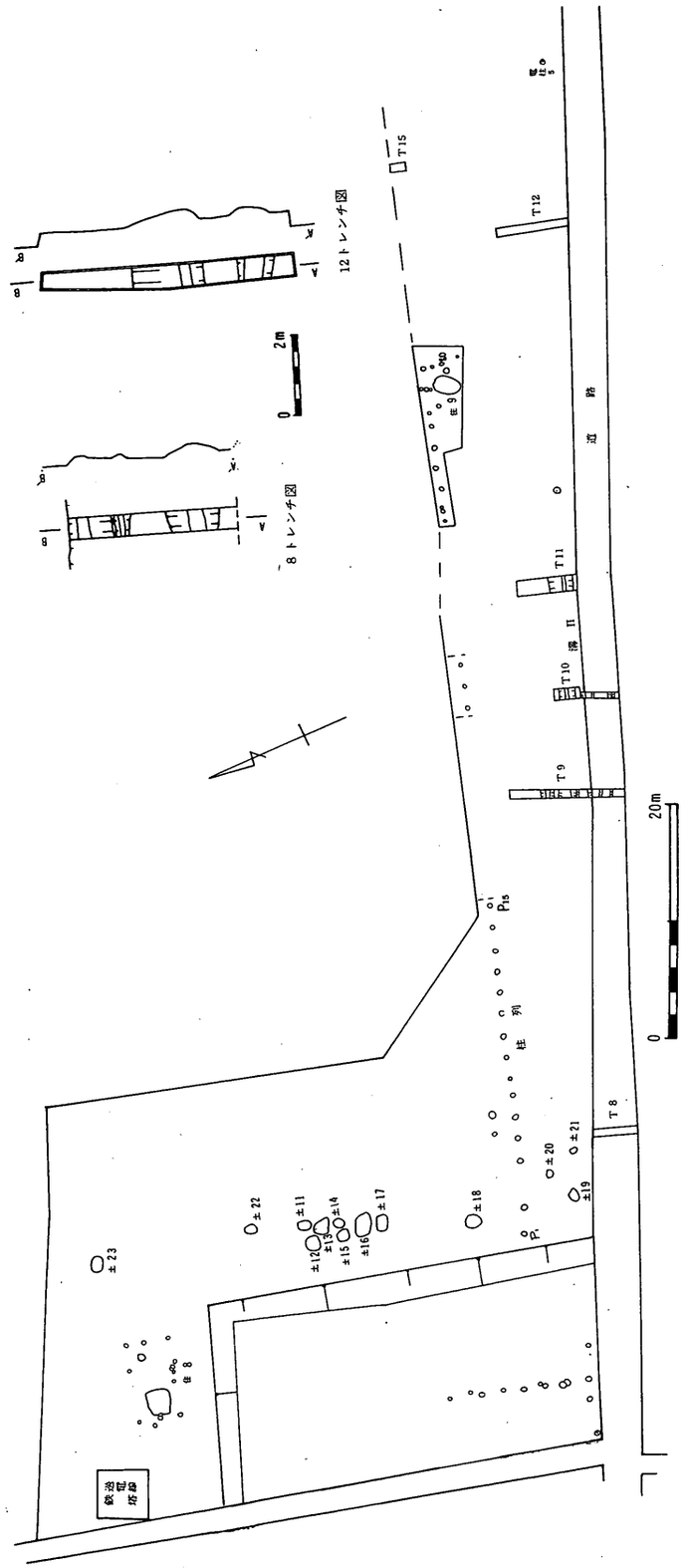


図6　松尾南の原遺跡　1974年調査遺構図Ⅲ（B区）

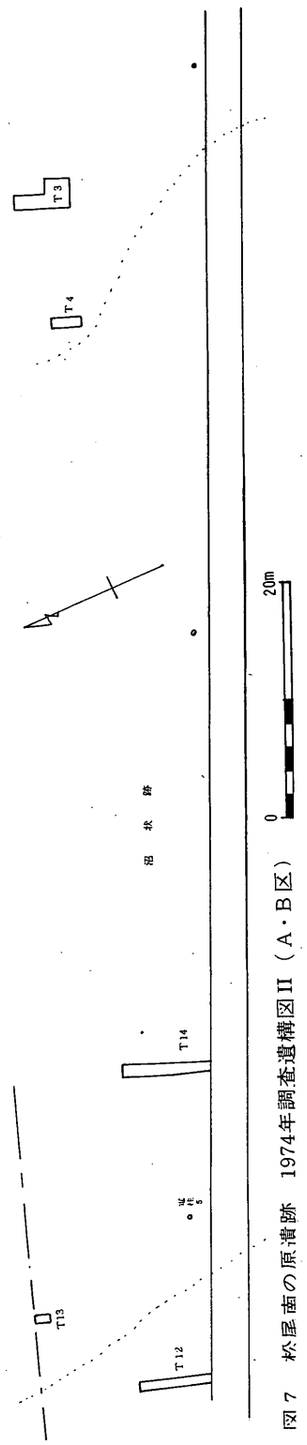


図7　松尾南の原遺跡　1974年調査遺構図Ⅱ（A・B区）

溝ⅠとⅡの共通点は，沼状跡をはさんで東西方向にあり，その北側に道路址，または土塁址とみるマウンドをもつこと。溝底部は水の流れた痕跡，また水の溜っていた痕跡をもたないことである。

溝Ⅲ（図５・９）は，北側は来年度の調査に待たねばならぬが，北から南に向き，溝Ⅰが南にカーブする地点で切られ，溝Ⅰの西側を平行しているが，溝Ⅰによって東側は削られている。巾2～2.5ｍ，深さは70㎝内外のものである。第５トレンチでは，その存在は確かめられたが，それより南は工場敷地のため整地され，十分な調査はできなかったが，トレンチ調査では，その存在を認めるおとはできなかった。

溝内の遺物には，溝Ⅰより茶臼の上臼，永楽通宝をはじめ，天目茶碗，皿，すり鉢片等の出土をみており，溝Ⅱでも同系統の陶器片があり，第14トレンチの沼状跡よりは青磁の皿の出土をみている。

(2)　路址，または土塁址（図５・６・８）

溝Ⅰ・Ⅱの北に平行して両側より土を巾50㎝～70㎝前後に盛り上げたものである。高さは現状では南側で20㎝余，北側で10㎝程度であり，南側には礫がはいっており，堅く側面をしめている。溝Ⅰが南にカーブする地点で同方向のカーブを示す。段丘崖下からの古い道がこの辺りを通って枡片羽へ通じていたといわれるが，その古い道へ通ずる痕跡はカーブする所でそれより東は断れている。　形に折れているとすれは路址であるが，その痕跡は調査段階では発見できなかった。巾から考えれば路址であり，溝との関連からみれば土塁址と考えられ，土塁とすれば規模の小さなものと推定される。

(3)　柱穴列（図６・７・10）

溝Ⅱより北約５ｍ離れて，それと平行して一列に柱穴が並ぶ。部分的な調査に終わったが，水田地帯より東20ｍは，かつて水田造成のため遺構は破壊され不明であるが，それより東70ｍにわたって柱穴が認められている。柱穴間隔は1.8ｍ（１間）が主で，これより短い間隔も僅かにみられる。深さは40㎝以上が多く，８㎝と浅い特殊なものも１こある。これら柱穴の並びからみて柵と考えたい。

(4)　住居址（図５・６・11）

溝Ⅰが南にカーブする北側に７号，水田ぎわの小高くなった所に８号，沼状跡の西に９号住居址がある。

７号住居址（図８）は南北6.5ｍ，東西19ｍに柱列と囲炉裏跡２こがある。柱列は正しく通らないものもあり，建替または幾棟かよりなる建物跡とみられる。住居址の中央部は溝Ⅲを埋立しており，囲炉裏址はここに造られている。張床面を最初に部分的に壊す誤りも犯した。規模からみて屋敷跡の一部と考えられるもので，北側の来年度の調査を待つものである。遺物には天目茶碗，皿，すり鉢等の陶器片と内耳土器片がある。

８号住居址（図11）は南北４ｍ×東西７ｍに３間×３間の建物である。柱穴間隔は約1.8ｍと4.5ｍ（2.5間）。西側中央部に1.8ｍ×2.3ｍの隅丸方形の浅い掘りこみがあり，中に人頭大の石が配せられているが，何である か把握できたかった。遺物は少なく，鉄鋌，内耳土器片の出土をみたのみである。

９号住居址（図６）は柱列の東端にあり，沼状跡に隣接している。南は盛土，北は76年度調査区，また湧水が多く十分な調査はできなかった。西側に２ｍ×1.5ｍの楕円形をなし，深さ70㎝，湧水で調査不十分であり，さらに深くなるとみられる貯蔵穴があり，南側へ深くえぐりこむものである。遺物には輪花皿，内耳土器片，砥石，鉄片，鉄鋌等がある。

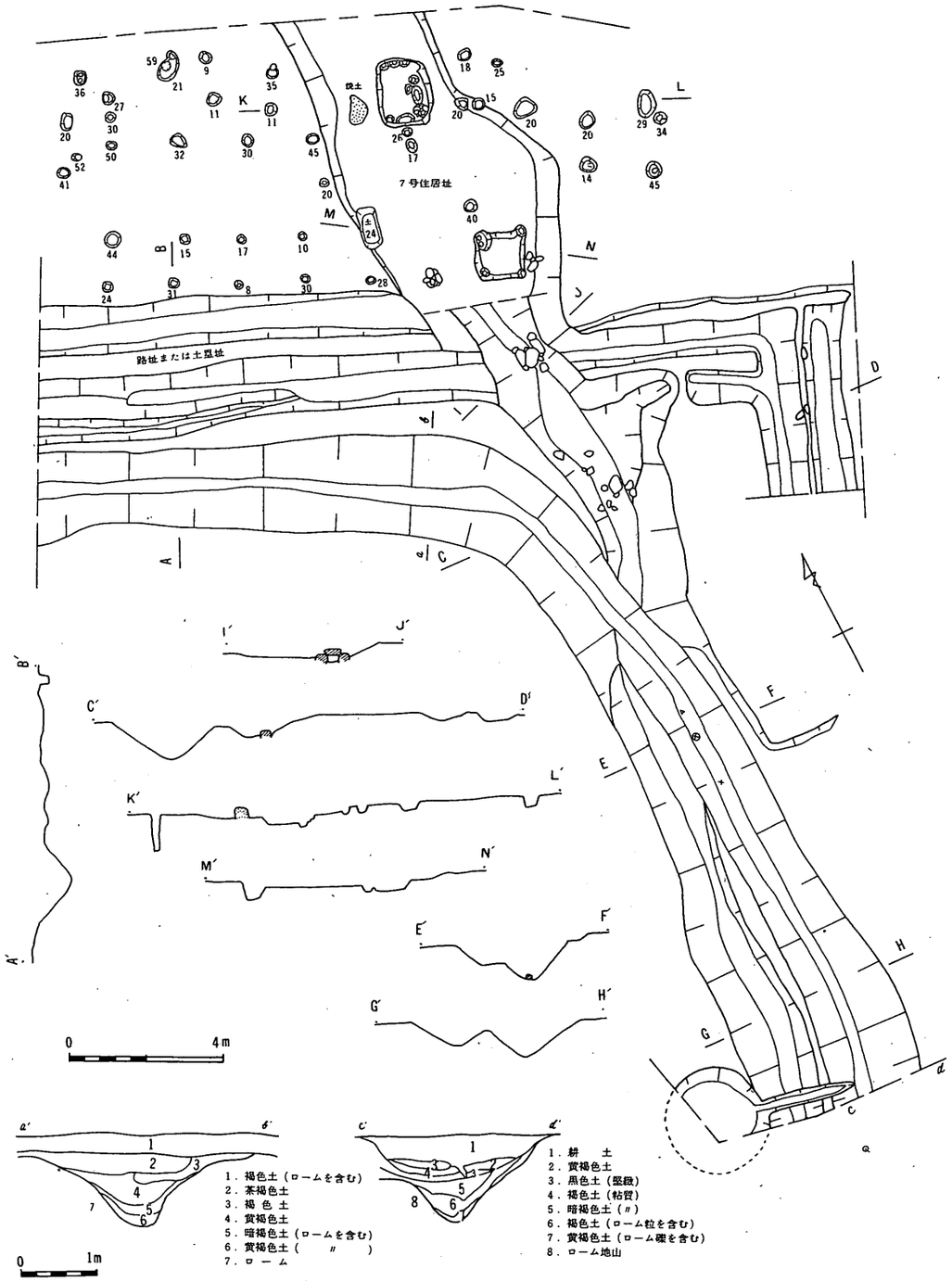


図８　松尾南の原遺跡東溝の中心部と７号住居址

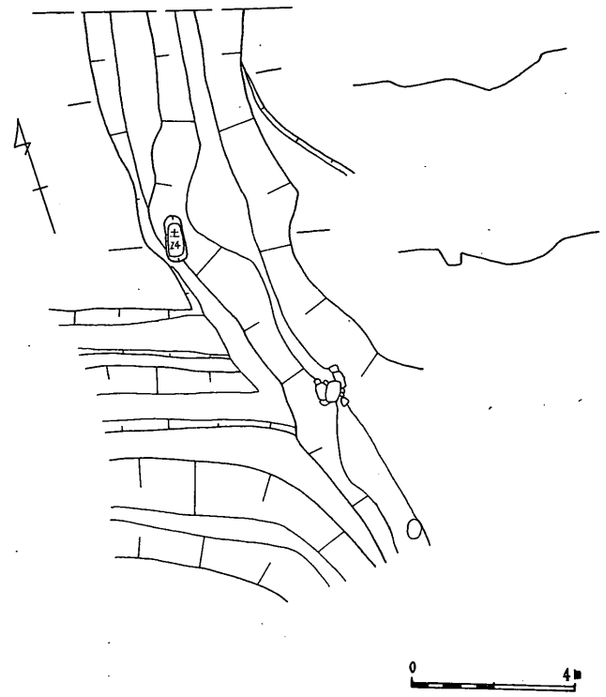


図９　松尾南の原遺跡溝Ⅲの北溝図

(5)　土　坑（図５・６）

Ａ区では24号，Ｂ区では南北方向に並んで11号～23号が発見されている。形態と，内部に木炭を多く含むことからみて火葬墓と考えたいが，火葬骨，骨灰を検出したのは20・22・23号のみである。遺物は12・16・18・19号にはなく，他はいずれも上層部に内耳土器片が置かれていた。内耳土器だけをもつものに11・13・15・17号があり，20号にはフイゴの小破片が多量に検出され，12・14号は良質な天目茶碗，すり鉢，その他の陶器片の出土をみている。

(6)　ピット群（図５）

Ａ区の東端部に発見され，南北3.8ｍ×東西6.4ｍに径40cm～70cm，深さ20cm前後のピットが16こ方形に配せられ，建造物跡とも考えられ，また土坑ともみられるが，遺物はなく，その性格を把握するにはいたらなかった。

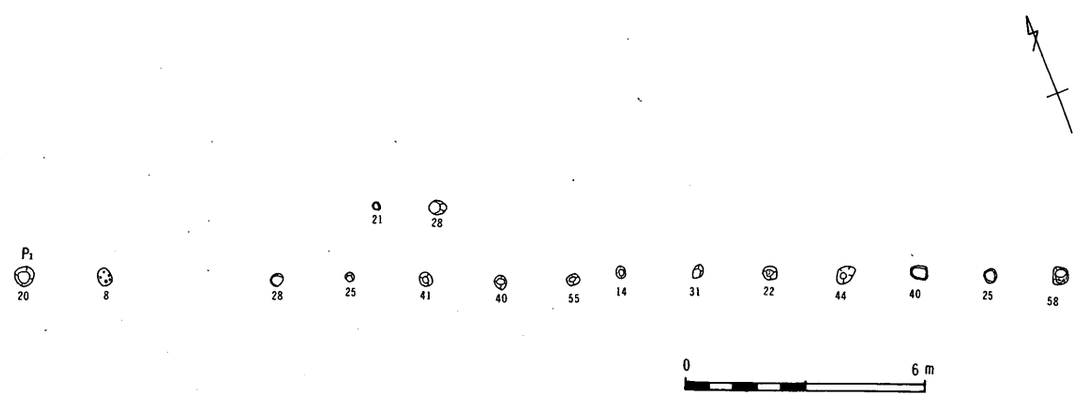


図10　松尾南の原遺跡柱列址（１：60）

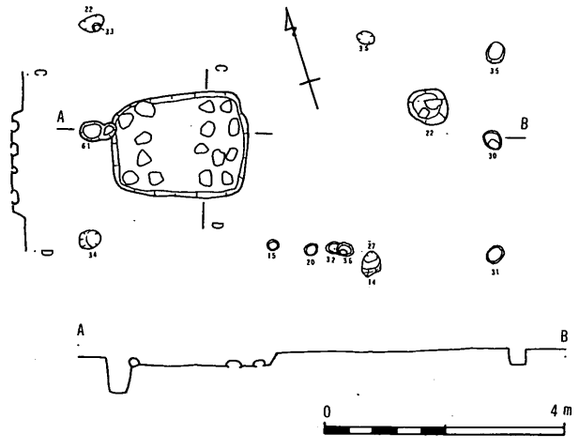


図11　松尾南の原遺跡８号住居址図

２．遺　　物

(1)　中世の遺物（図12～15）

1972年，1974年の二次にわたる遺構出土遺物については差を見出すことはできない。同一系統の陶器の出土をみており，遺構別でなく，全遺構が関連性をもつものとして，ここでは遺物をとりあげることにした。

常滑甕（図12の１～３）　大部分は屋敷跡に多く，特に貯蔵穴からは大破片が多く出土しており，火葬墓群からも出土している。口縁部の折りかえし部分が肥厚して接着するもので，　図12の２の肥厚に大きい。信長の天正２年（1574）の常滑禁窯令のでる直前の古常滑終末様式のもので，室町時代後半に位置づくダブガ脇様式と呼ばれるものである。押印をもつ（図12の４）の２片があり，同時期のものである。南の原屋敷跡の時期を知る手掛りをなすものと受けとめたい。

天目茶碗（図12の５～11）　図12の５は，屋敷跡囲炉裏の中に埋められて出土した完形品，口径12.[illegible]cm，高さ6.5cm，内面底には文様とも文字ともみる刻みがあり，緑色を呈すすばらしい逸品である。屋敷跡よりの天目茶碗に６・10・11があり，６は火災による二次変化を呈す。８は６号住居址，９は７号住居址，７は12号土坑よりの出土，10・11はアメ天目，他は黒天目である。これ等の他天目茶碗の小片の量は多い。

すり鉢（図13の２～６）　小破片は多く出土をみており，特に屋敷跡よりの量は多い。図13の２・４と１の壺はピット内に重なって出土したものである。２はほぼ完形に復元されている。いずれも鉄泥を塗っただけのうすい釉がかかり，底部は糸切底である。小破片も同系統のもので，時期的にも大きな差はないとみられる。

皿（図12の12・13，図14の４～25）　屋敷跡の倉跡床面よりの出土が最も多く，溝Ⅰ，Ⅱの底部からの出土も多い。図12の12は沼状跡の粘土の堆積より出土し，波状口縁をなし，内面に唐草文，底部には亀甲文とみるものが描かれている。良質な青磁で竜泉窯とみられる。図12の13は９号住居址出土の輪花皿，図14の４は内面に花辨状に沈線が施されており，黄瀬戸系である。その他もいずれも良質な皿で，鉄釉がたっぷり施され，瀬戸周辺のものとみられる。図14の２は，乳白色を呈し，他の胎土がやや黄味をもつにたいし，白ぽい色で窯址の異なるものとみる。図14の19・20は火災による二次変化がみられる。

壺（図13の１）　壺の破片は多いが，図示できるのは，この１こで，鉄釉の美しい良質なものである。茶入（図14の20）屋敷跡の出土で，鉄釉の美しいもので，糸切底に高台を不規則にはりつけている。

内耳土器（図14の１～３）　住居址，土坑より出土をみており，小破片の量は多い。図14の１は土坑16号，２は溝Ⅱ，３は土坑16号出土である。

素焼土器（図14の17～19）　17は住居址６号，18は火葬墓群，19は屋敷跡よりの出土で，いずれも糸切り底，胎土は砂質粘土で焼成は堅い。

鉄器には図14の21～23があり，21は屋敷跡倉の床面より出土した小柄，22の鎗の石突，23は釘で，火葬墓群よりの出土である。

古銭　図14の24～26があり，24の永楽銭（1408年明成祖）は溝Ⅰの底部に茶臼２号と伴出している。25は熙寧元宝（1608年宗神宗）で，74年調査の土坑墓群より出土している。同地点出土の26は不明である。

茶臼　図15の11の茶臼１号は屋敷跡囲炉裏内に埋められていた完形品で見事なできばえのものである。２の茶臼２号は上臼だけが溝Ⅰの底部に永楽銭と伴出した完形品である。いずれも砂岩製で精巧な仕上げである。

石臼　図15の３・４は，３が上臼，４が下臼で安山岩製であり，現在みる石臼とは形状が異なる。

砥石　図15の３があり，９号住居址出土である。

(2)　縄文時代，弥生時代の遺物（図16）

弥生時代の石器に図16の１～３があり，１の石鏃は硬砂岩製で1010ｇと大形である。２は蛤刃形磨石斧，３は打製石包丁であり，１，２は溝Ⅰより，３は屋敷跡周辺よりの出土である。縄文時代の石器に図16の４～７があり，５の石錘の他は打石斧で溝Ⅰ内部よりの出土が多い。

ま　と　め

1972年，1974年の二次にわたる調査は工事用地の広範な面積の一部で終わったが，発見された遺構は中世松尾城跡に関連する武士団の屋敷跡，北側にそれに伴う溝―溝Ⅰでは明らかに薬研堀であり，これに平行する土塁址または路址とこの北に並ぶ柵列があり，これらが台地中央部にある沼状跡をはさんで東西の両側に構えられる屋敷跡に付帯する住居址があり，この周辺に火葬墓群，または土坑墓がある。1975，1976年度の工事用地の発掘調査によって，これら中世家臣団の屋敷跡，これに伴う防禦施設が或る程度解明されるものと予想される。

遺物からみて，茶臼，天目茶碗をはじめとする見事な陶磁器の出土は室町時代後半における松尾小笠原氏の重要家臣団の居がここに構えたものと受けとめられる。

弥生時代の石器，縄文時代の石器の出土はここに，この期の遺構の存在することも予想され，今後の調査に大きな期待がもたれる。

本調査にあっては飯田女子短大の大沢和夫先生，県文化課今村善興指導主事，調査員として御骨折りいただいた今村正次先生をはじめ作業に従事された方々に深く感謝の意を表わしたい。また今次調査にあたって三菱電機中津川製作所飯田工場で受けた御便宜の大きかったことを付記したい。

本時報告書は二次にわたる調査の略報というべきで，全調査終了時に本報告書をまとめて出版することになっている。この報告書は今村正次の見解をもとに佐藤が執筆し，製図は中塚悦子に労をわずらわした。なお図のピットの横（中）に付した数字は床面からの深さをcmで表わしている。

（佐　藤　甦　信）

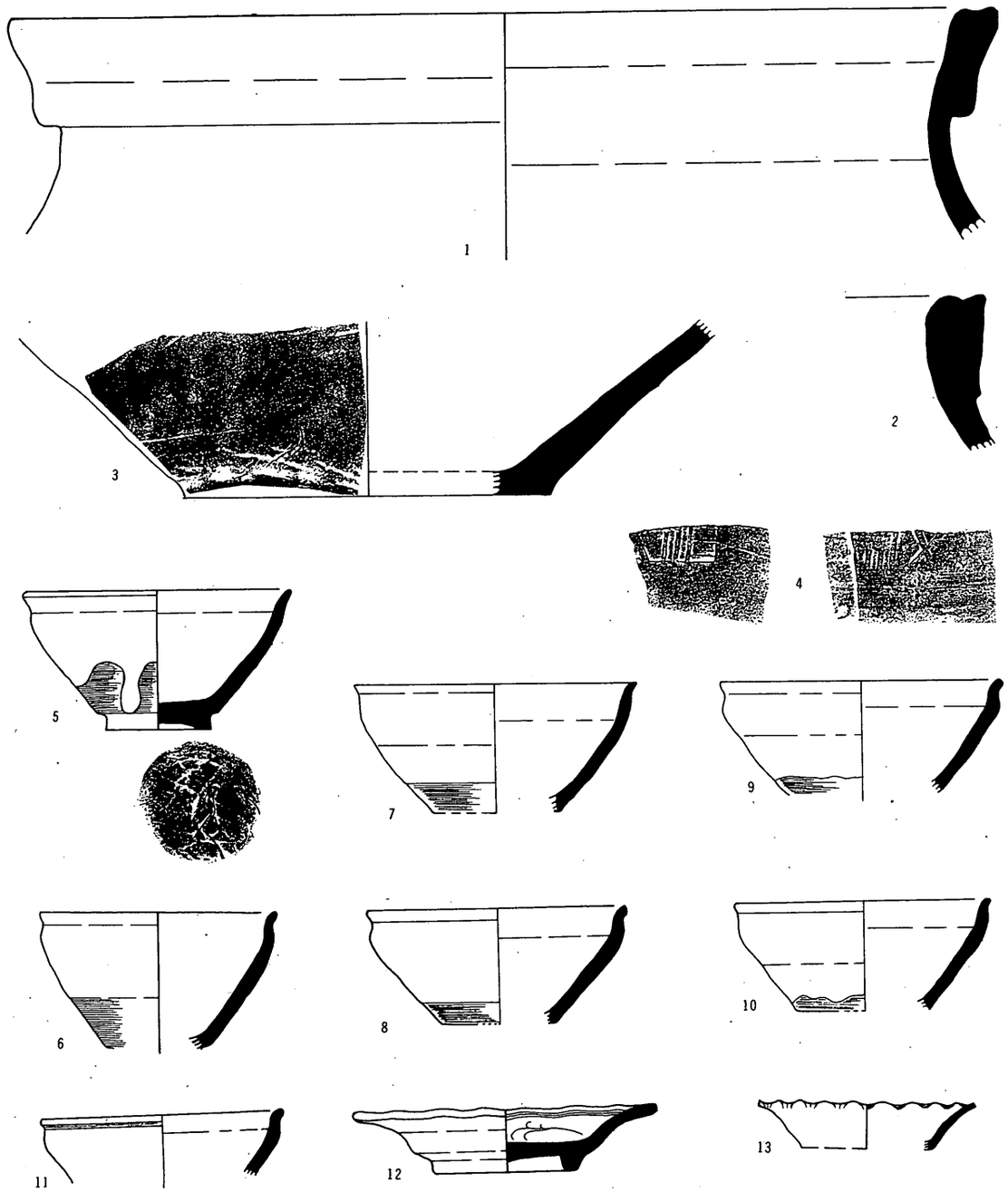


図12　松尾南の原遺跡出土中世遺物Ⅰ（１：３）

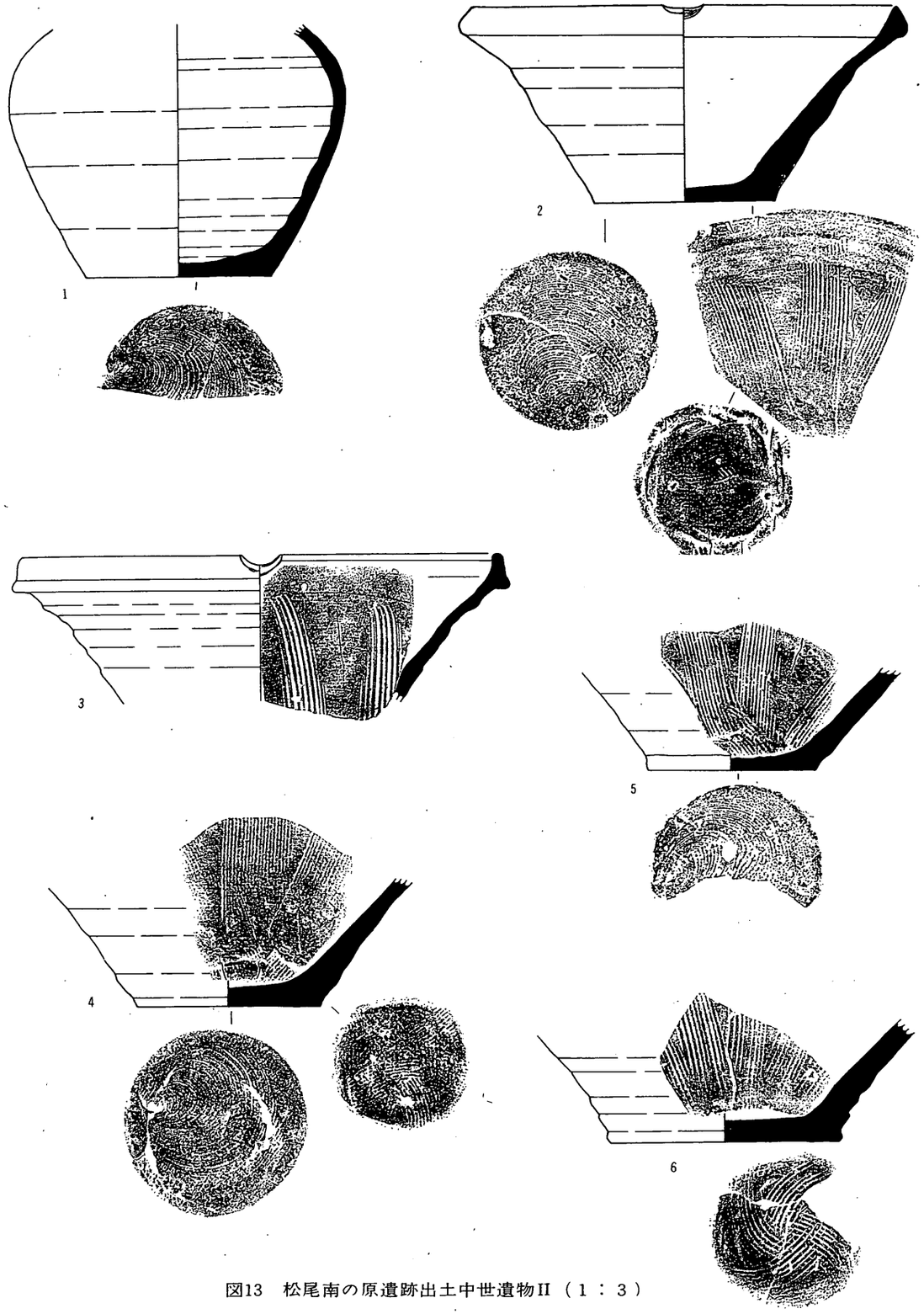


図13　松尾南の原遺跡出土中世遺物Ⅱ（１：３）

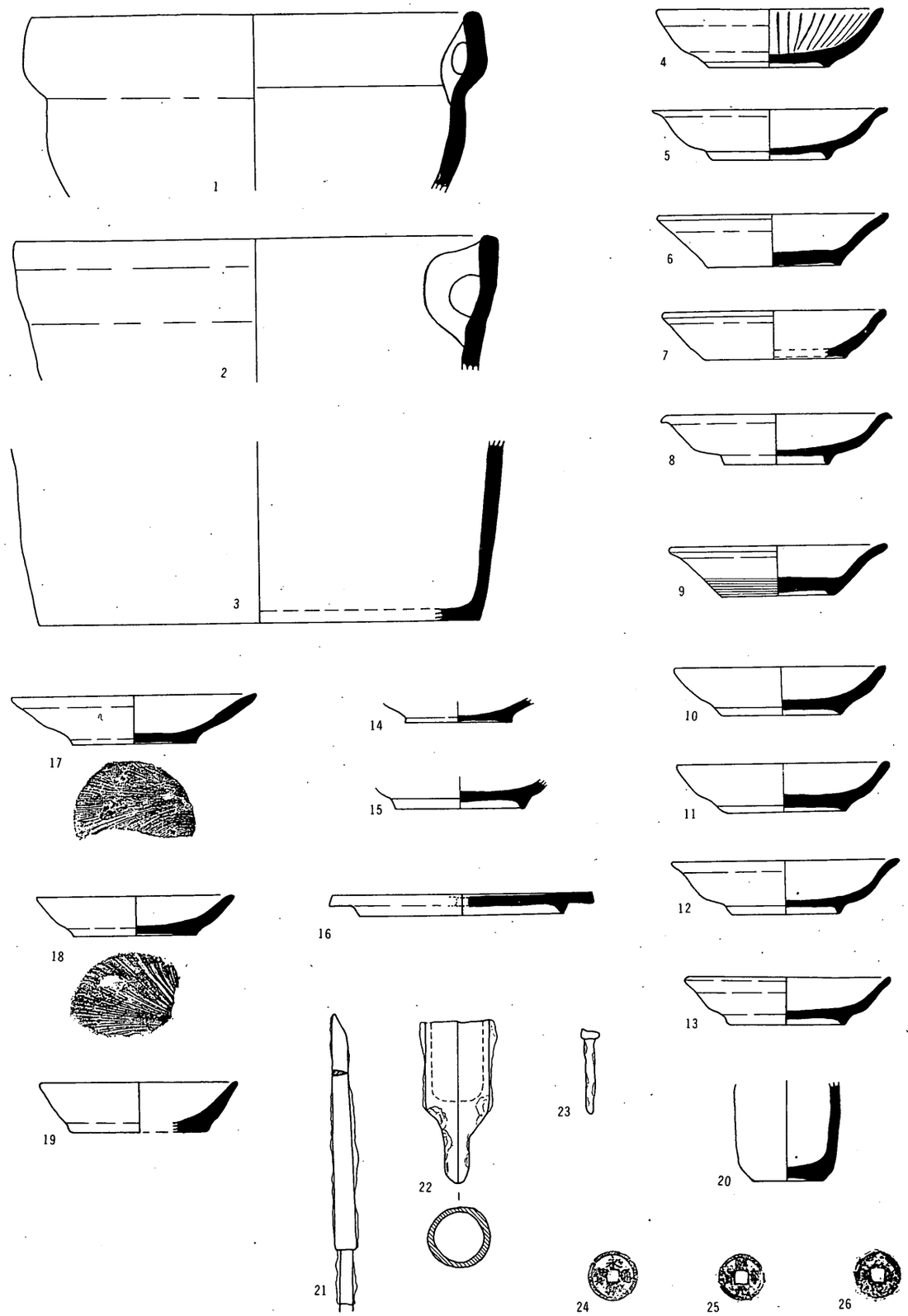


図14　松尾南の原遺跡出土中世遺物Ⅲ（１：３）

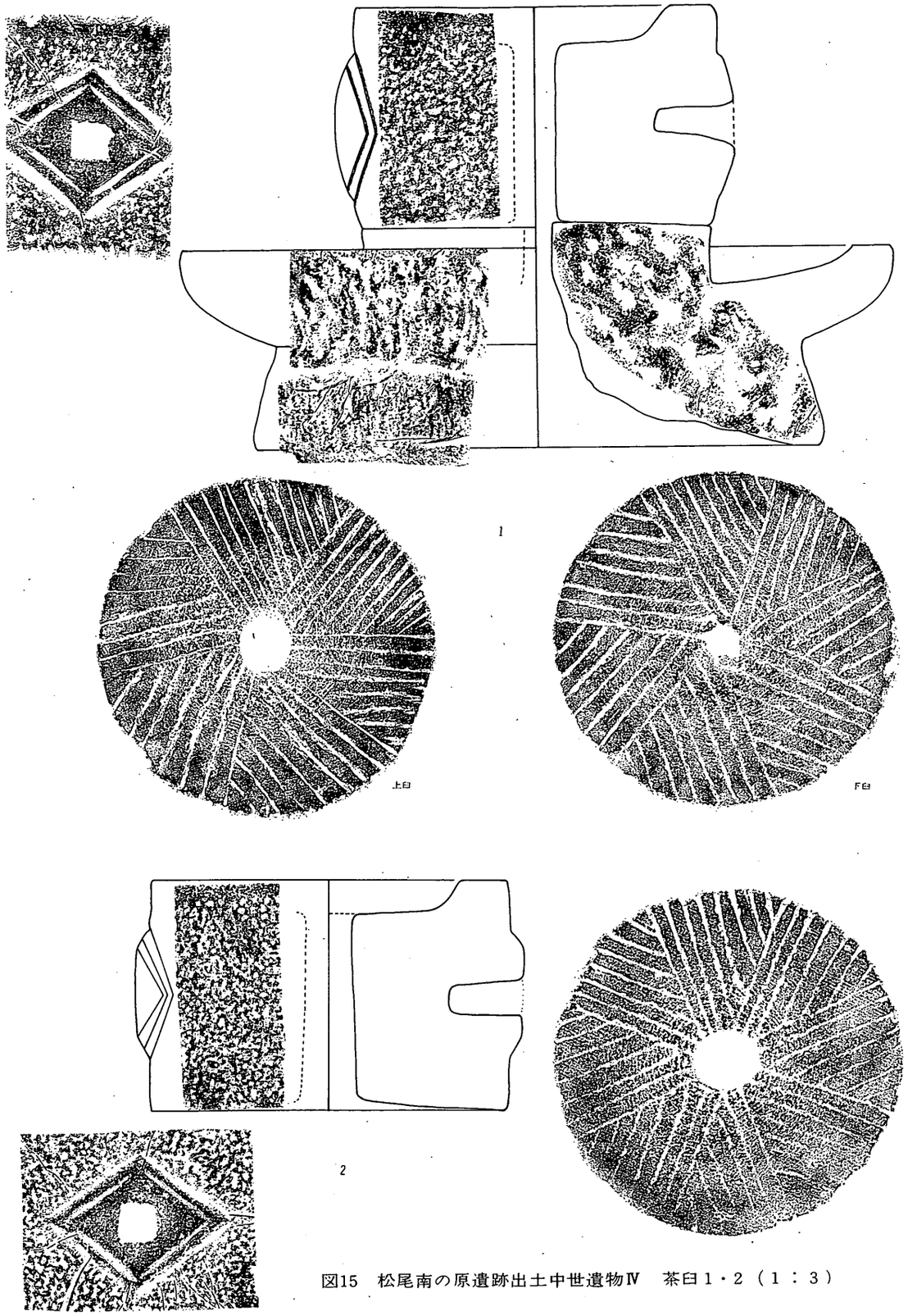


図15　松尾南の原遺跡出土中世遺物Ⅳ　茶臼１・２（１：３）

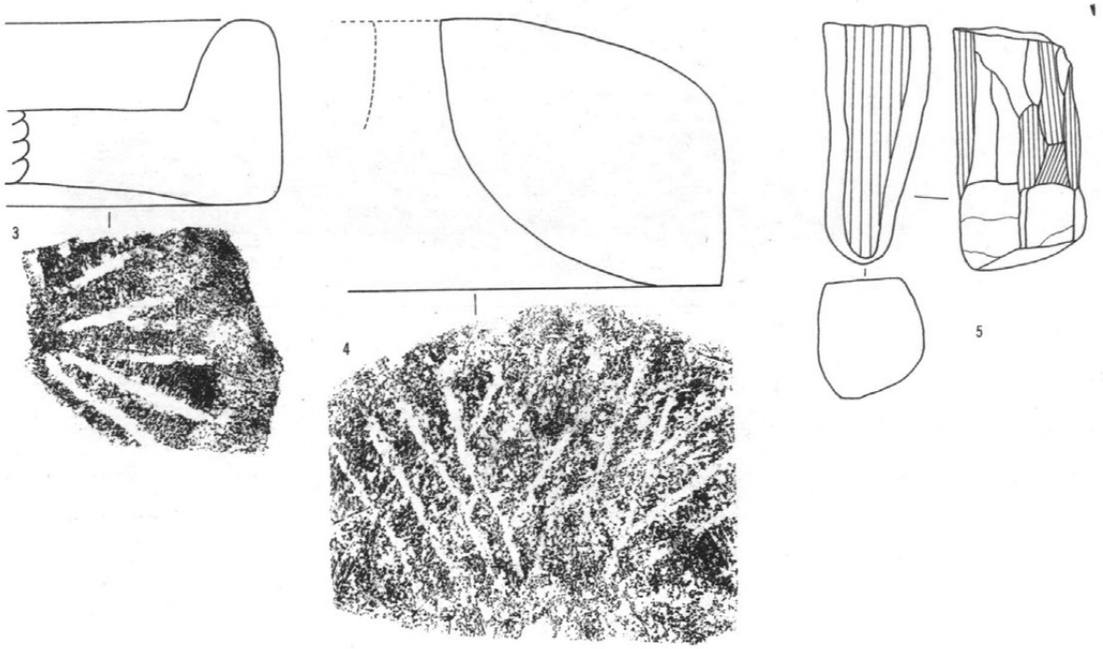


図15　松尾南の原遺跡出土中世遺物Ⅵ（１：３）

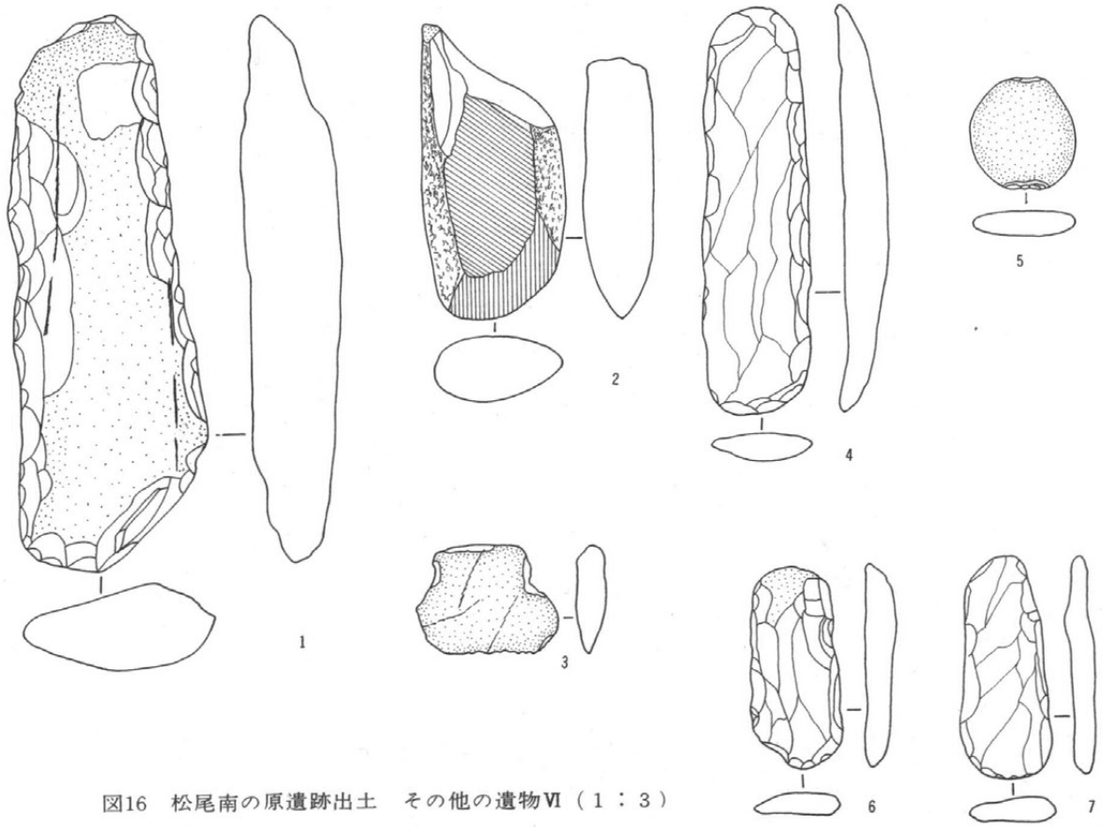
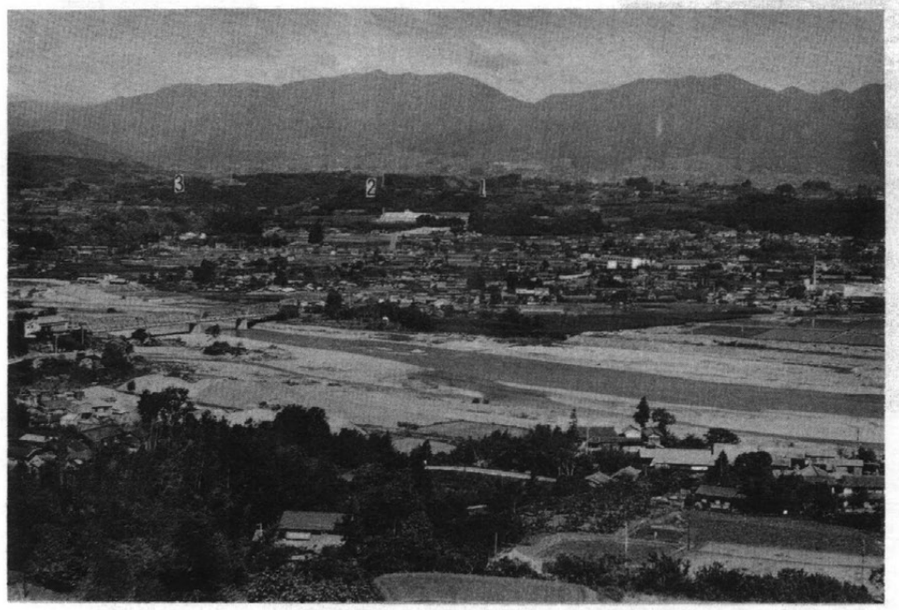
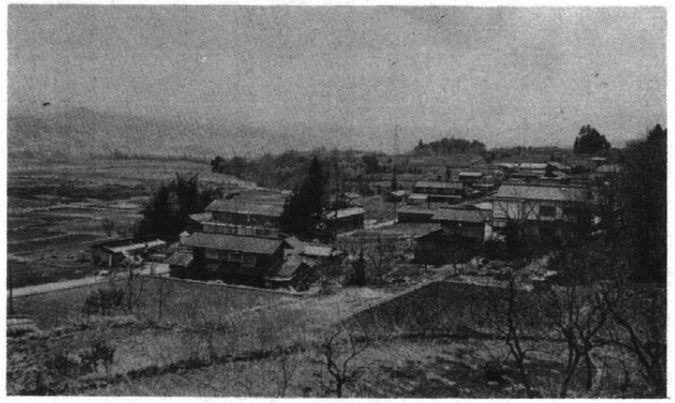


図16　松尾南の原遺跡出土　その他の遺物Ⅵ（１：３）



遺跡の遠景　　１．南の原　２．松尾城跡　３．鈴岡城跡

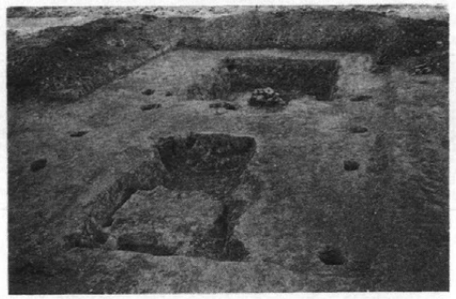


遺跡（左）と松尾城跡（右）

遺跡全景　名古熊台地からみた

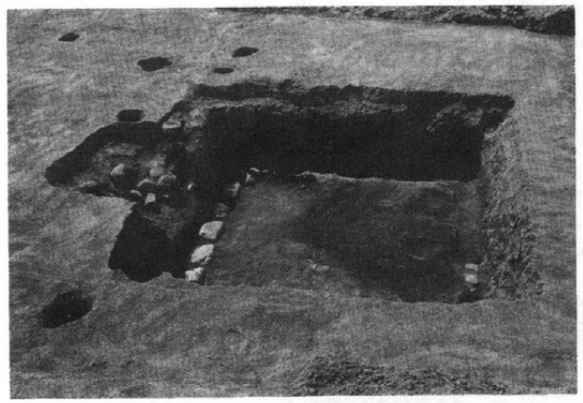
調査前の遺跡　南からみる

中世屋敷跡　東からみる手前が１号遺構



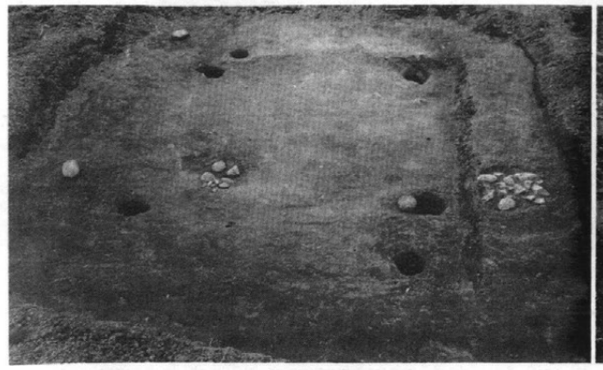
中世屋敷跡　２号・３号遺構

中世屋敷跡　西からみる

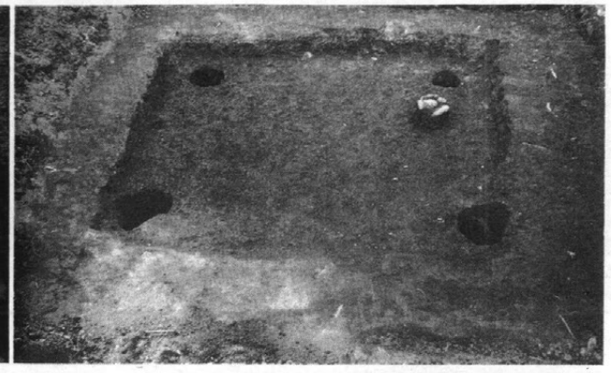


中世屋敷跡　３号遺構（倉庫）

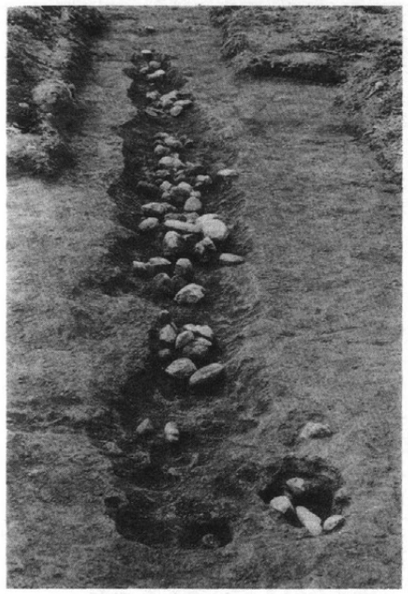
中世屋敷跡　４号遺構



５号住居址



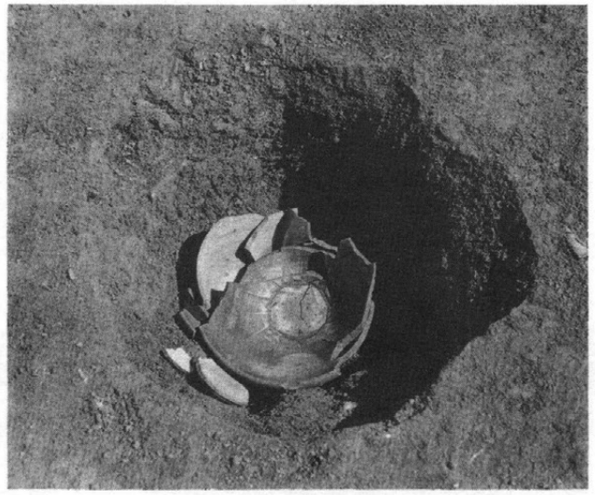
６号住居址



火葬墓群

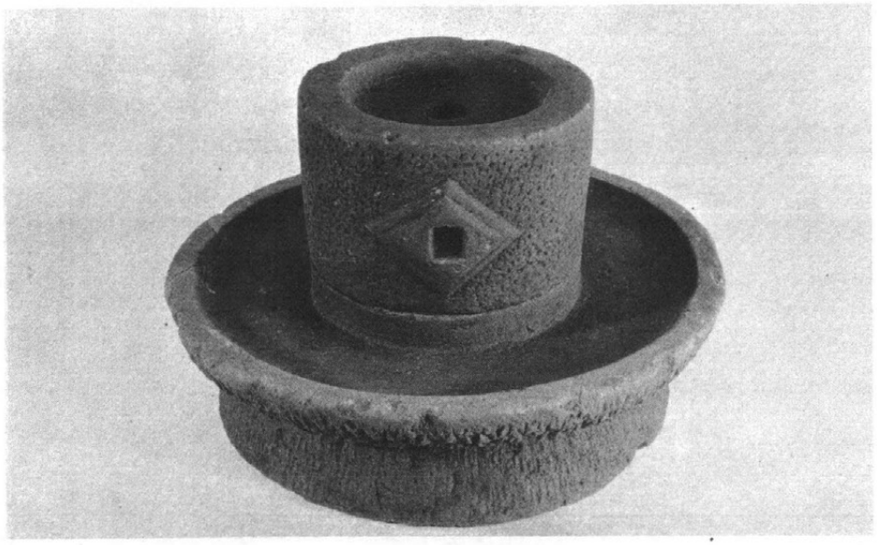
茶臼１号出土

天目茶碗出土

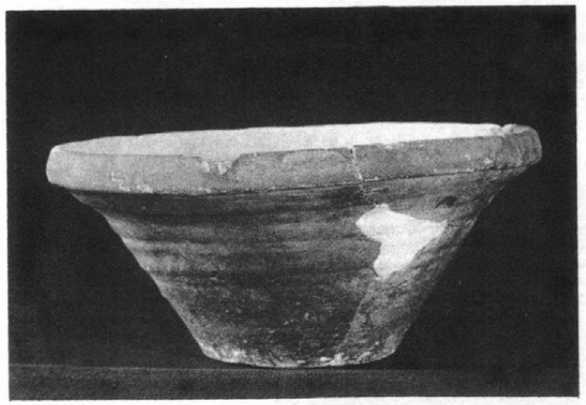


すり鉢出土

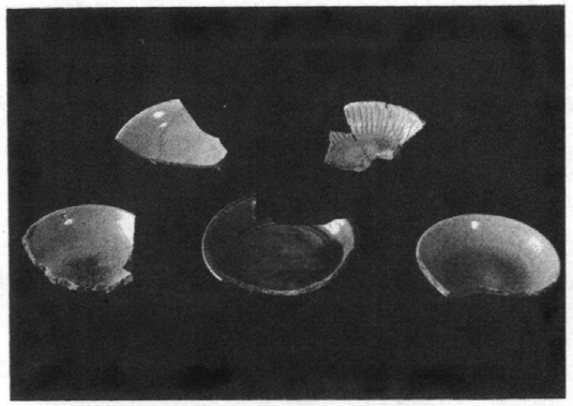
天目茶碗



茶臼1号



すり鉢

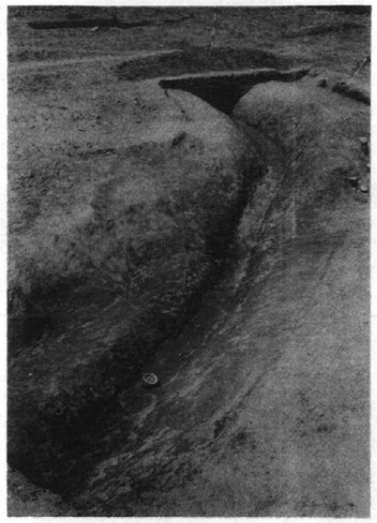


皿

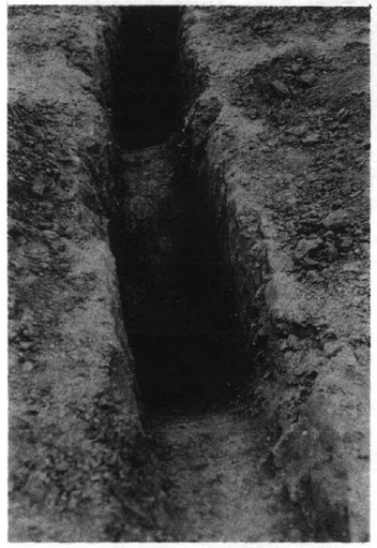
1974年調査前の遺跡

溝Ⅰ（薬研堀ともみられる）

溝Ⅰ　断面



溝Ⅰ



溝Ⅰをトレンチで南東への延長をさぐる

溝Ⅱをトレンチでさぐる

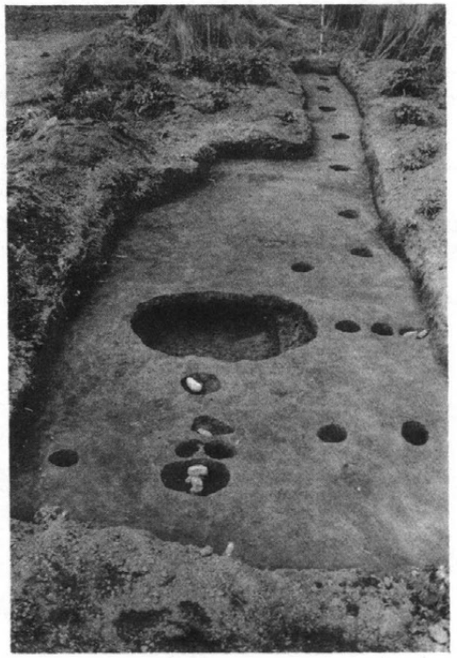
7号住居址（屋敷跡もみられる）

柱列址

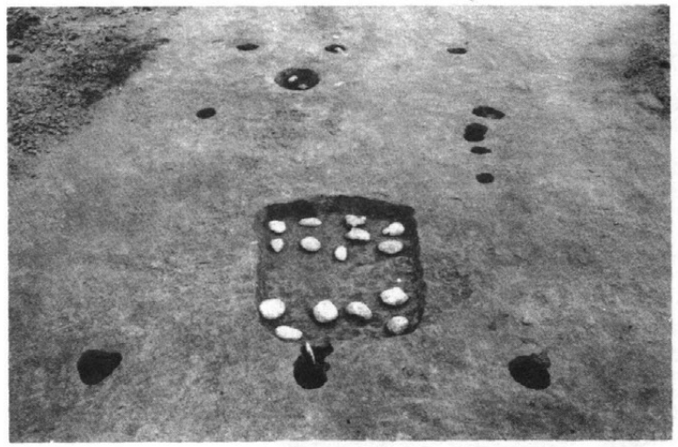
ピット群

溝Ⅲ（7号住居址はそれを埋めてつくられている）

土坑群



9号住居址の1部



8号住居址

茶臼2号と永楽銭出土

皿　出土

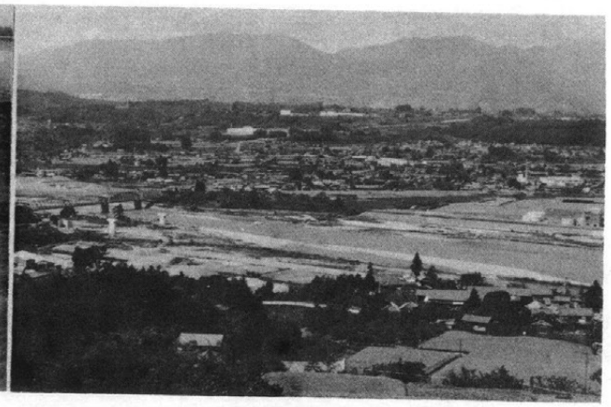
1972年調査　1

1972年調査　2

1974年調査　1

1974年調査　2

1974年調査　3



1974年遺跡遠望
台地上の建物が三菱電機飯田工場

松尾南の原遺跡発掘調査概報

— 中世屋敷跡を中心とした —

1972・1974

三菱電機株式会社中津川製作所
飯田市教育委員会

印刷　飯田市通り町1（株）秀文社